

1 地域の概略等

唐津・玄海地区は、唐津市と玄海町の1市1町からなり、佐賀県北西部に位置し海（玄界灘）と山が調和し自然豊かで農業が盛んな地域である。

また、「唐津くんち」や「虹の松原」、「名護屋城跡」、「唐津焼」など多数の観光資源を有する地域としても知られている。

このような地域にあって、畜産業は重要な産業として位置付けられており、JAからの平成29年度販売品取扱高のうち畜産は135億円で、全体の約45%（うち肉用牛は123億円で約41%）を占めている。

特に肉用牛が盛んな地域であり、平成29年3月末の肉用牛農家戸数は238戸（繁殖191戸、肥育47戸）、肉用牛飼養頭数は21,320頭で県全体の40%以上を占めており、「佐賀牛」生産の一大産地として位置付けられている。

繁殖農家数と繁殖牛頭数の推移（JA からつ）



2 取り組みの経緯等

農家の高齢化や後継者不足を背景に肉用牛生産農家戸数は年々減少し、繁殖雌牛頭数は平成21年の5,209頭をピークに減少傾向となり、佐賀牛の主産地でありながら、肥育素牛の50%以上を他県から導入している状況もあり、繁殖雌牛頭数の増頭が急務となっていた。

当地区では、平成 23 年に J A からつキャトルステーション（以下、「C S」）を建設し、年間約 840 頭の子牛を預り育成するなど、J A からつが中心となって、繁殖農家の労働負担の軽減による規模拡大と発育が良く高品質な肥育素牛の生産拡大を支援してきた。

平成 27 年には繁殖農家を対象にアンケートを実施し、今後 5 年間で約 14% が離農を予定するなど、更に頭数が減少することが予測された。

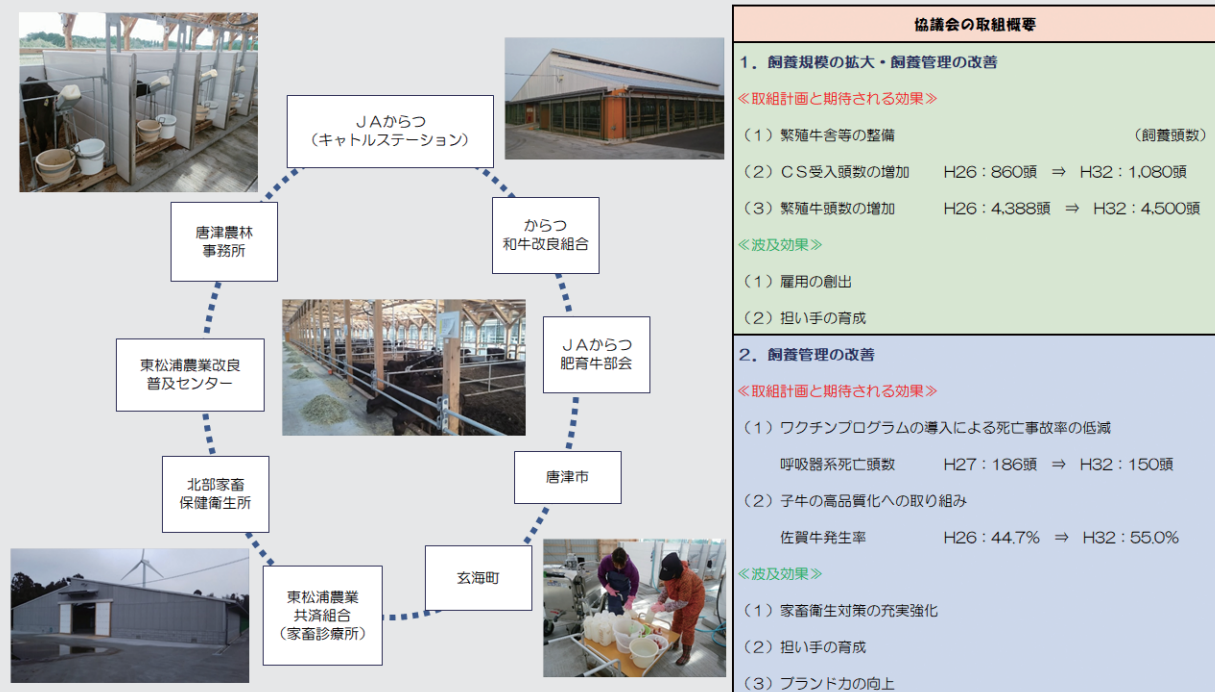
一方で、後継者のいる経営や一貫経営を中心として、繁殖部門の拡大意向を持つ農家も少なからず存在していたこと、C S を利用することで酪農家による乳用牛への和牛受精卵移植や、肥育農家による一産取り肥育など、和子牛生産頭数を増加させる新たな取り組みが開始されていたことから、これらの農家を支援するための体制整備が求められていた。

このような中、これらの繁殖農家等の意見を汲み取り、平成 28 年 4 月「唐津・玄海肉用牛振興協議会」を設立し、地域の関係機関が連携することで、繁殖農家の労働負担軽減及び規模拡大、優良な肥育素牛の確保を総合的に支援するサポート体制の充実を図り、以降、肉用牛生産頭数確保のための様々な取り組みが実施された。

これらの取り組みにより、平成 28 年に 4,251 頭まで減少した繁殖雌牛の飼養頭数は、平成 30 年には 4,596 頭まで回復した。

地域内の繁殖農家の高齢化が深刻化する中で、農家支援施設である C S の活用を基本とした支援体制は、肉用牛生産頭数確保のための中心的な活動として位置付けられている。

唐津・玄海肉用牛振興協会（畜産クラスター協議会）の概要



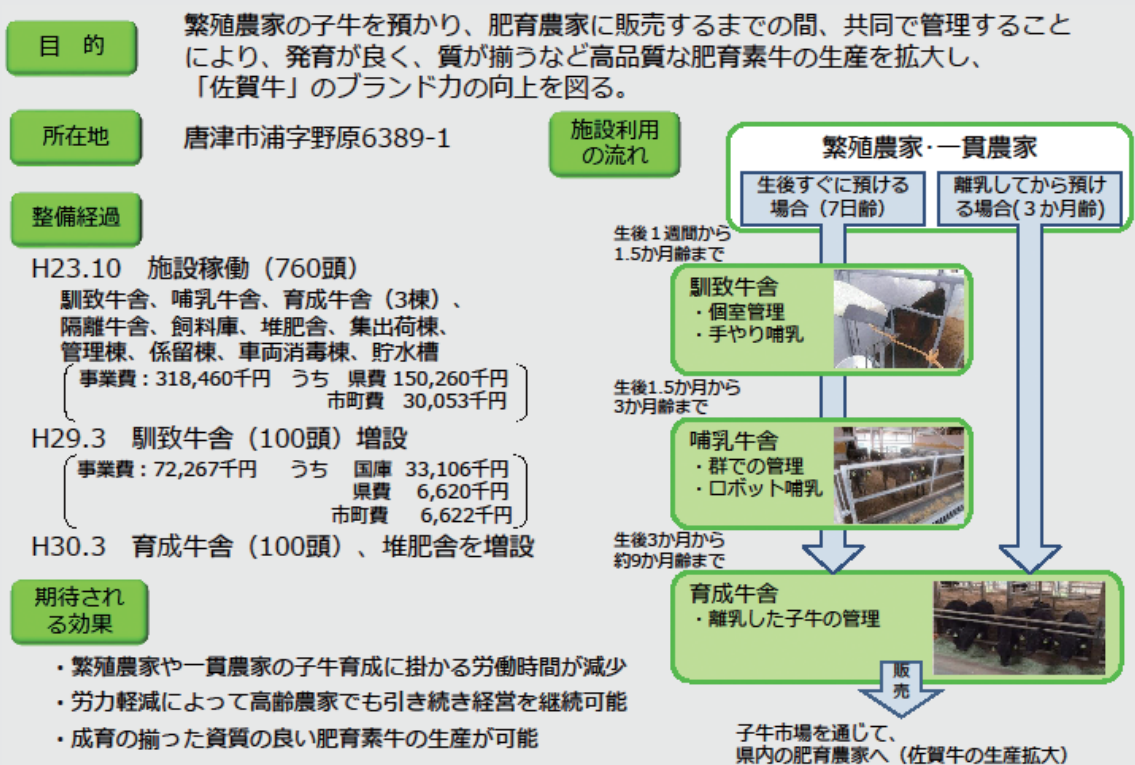
3 取り組みの目的・内容等

(1) 農家の飼養規模拡大・労働負担軽減のための取り組み

既存CSの機能向上によって農家の負担軽減と規模拡大を促進し、あわせて中心的な経営体を育成するための施設整備及び組織的なサポート体制の強化、更には、CSや中心的な経営体での新規雇用創出による担い手の育成確保等に取り組み、平成32年度にJA管内の飼養頭数4,500頭とすることが目標とされた。

(目標) CS受入頭数の増加 (H26) 840頭 → (H32) 1,080頭
 繁殖雌牛頭数の増加 (H26) 4,388頭 → (H32) 4,500頭

JAからつキャトルステーションの概要



ア JAからつキャトルステーションの増築及び機能の充実

畜産クラスター事業を活用し、CSの受入頭数を増加させるために飼養管理施設等 (馴致牛舎・育成牛舎、堆肥舎) の増築及び省力化のためのミルク製造機械装置 (ミルクモバイル) を導入した。

このことで、農家の負担軽減を図り、子牛預託農家の規模拡大の促進と、繁殖肥育一貫農家を推進することで、CSや規模拡大農家による地域の新たな雇用の創出を目指した。

なお、関係機関が協力し、改良組合の座談会や総会等の農家が集まる機会を見つけては、CS利用による繁殖雌牛増頭を農家に繰り返して働きかけた。また、CSで育成した子牛の枝肉共励会を開催し、育成子牛の質の高さを繁殖及び肥育農家に広く周知してきた結果、CS受入頭数は平成28年度の807頭から平成29年度には965頭に増加している。



馴致牛舎 (CS)



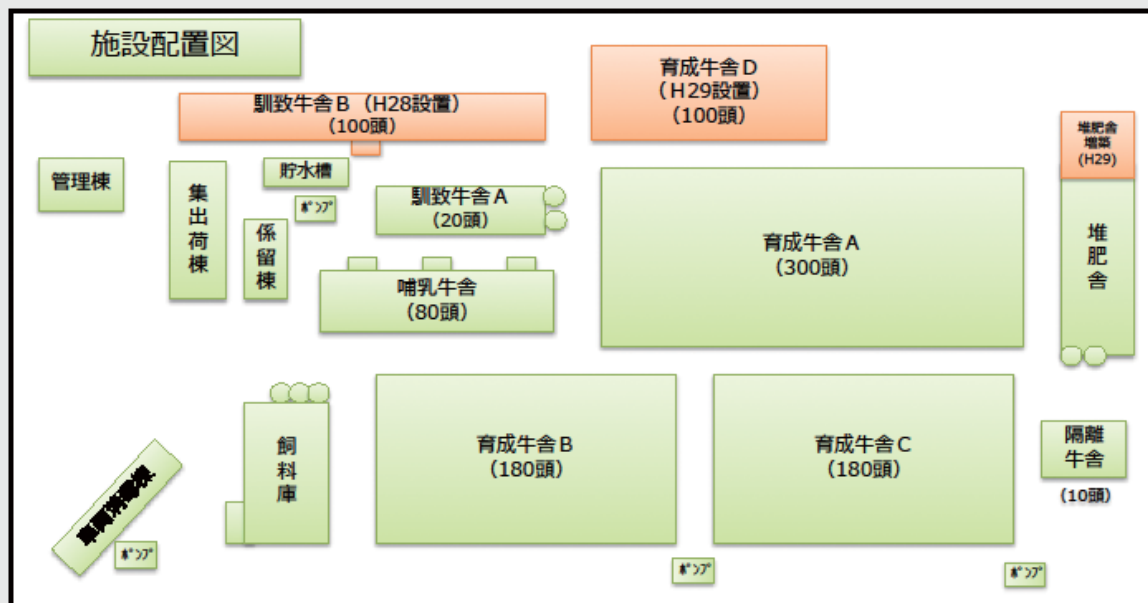
ミルクモバイル

(施設等整備状況)

平成 28 年度：哺育子牛馴致牛舎整備 (100 頭規模 1 棟)

ミルク製造機械装置導入

平成 29 年度：育成牛舎整備 (100 頭規模 1 棟)、堆肥舎増設



馴致牛舎 B (H28設置)



馴致牛舎の内部

個室管理

手やり哺乳

イ 中心的な経営体を育成するための繁殖牛舎等の整備

子牛生産頭数の減少による子牛価格の高騰が経営を圧迫する肥育農家自らの素牛生産を支援するため、畜産クラスター事業で繁殖牛舎を整備し、一貫経営の育成及び規模拡大を図っている。

また、関係機関が連携することで、事業実施後も綿密に技術的なサポート体制を継続し、健全な増頭を支援している。

(施設等整備状況)

- 平成 28 年度：繁殖牛舎整備（100 頭規模 1 棟）
- 平成 29 年度：繁殖牛舎整備（80 頭規模 1 棟）
- 平成 30 年度：繁殖牛舎整備（80 頭規模 1 棟）予定



繁殖牛舎の整備（A 牧場）

(2) 優良な肥育素牛の確保のための取り組み

子牛生産頭数を確保するためには、繁殖雌牛頭数の増頭を図るだけでなく、同時に子牛の損耗防止に取り組むことも急務の課題とされた。

特に農家の高齢化に伴う飼養管理不足等により、子牛の哺育期・育成期の呼吸器系疾病による死産事故及び発育遅延が多く発生する傾向がみられたことから、関係機関が協力してこの対策を実施した。

CSでは子牛の損耗を最小限に抑えるため、平成 26 年度から農場 HACCP（平成 27 年に推進農場認定）に取り組み、衛生管理の徹底による牛舎環境の改善を進めた。

また、平成 27 年には、畜産クラスター事業（調査・実証・推進事業）に取り組み、CSの育成子牛のワクチン接種を通常 1 回から 3 回とするワクチンプログラムを実施した結果、高い予防効果が発揮されることが実証された。

この結果を基に子牛ワクチンプログラムのリーフレットを作成・配布し、農家及び関係機関で情報共有することで、地域一体となった子牛事故防止のための取り組みが実施されている。



繁殖牛舎の整備（B 牧場）



馴致牛舎の内部（CS）

(3) 「佐賀牛」ブランド力の向上に向けた取り組み

CSでの農場 HACCP の取り組み内容を地域の農家に共有してもらい、HACCP の考え方に基づいた子牛生産や、県で推奨している「肥育素牛育成基本プログラム」を用いた良質な素牛生産に取り組み、安全・安心な畜産物の生産システムの推進及び「佐賀牛」ブランド力の向上を図っている。

(実績)「佐賀牛」発生率 44.7% (H26) → 53%

(目標)「佐賀牛」発生率 55.0% (H32)

※「佐賀牛」：肉質等級 5 等級及び 4 等級の BMSNo.7 以上のもの。

(4) 担い手の育成確保・新たな子牛生産頭数確保の支援

C Sを利用した肥育農家の一産取り肥育、繁殖農家（採卵供給）と酪農家の連携による、乳用牛を活用したE T事業（受精卵移植）での和子牛生産など、肥育素牛生産頭数を増加させるための先進的な取り組みの普及が図られている。

また、発情発見装置等のI C T技術を導入し、繁殖成績の改善、分娩間隔の短縮を促進するとともに、地域の関係支援組織が連携して管内農家の巡回指導を毎月実施することで、家畜衛生管理基準に即した適正な飼養管理方法の普及・推進を図り、子牛事故等の低減を支援している。



3 協議会の組織構成

本協議会は、地域の肉用牛の収益性向上のために施設整備と一体的に実施する取り組みを支援することを目的とし、機械装置等の導入による取り組み支援する協議会とは別に組織されている。

協議会の構成は、肉用牛農家 245 戸（平成 30 年度：（内訳）酪農 15 戸・繁殖牛 186 戸・肥育牛 44 戸（うち一貫 9 戸））のうち、施設整備を実施する中心的な経営体（2 戸）と J A からつ C S が取り組みの主体となり、事務局業務を行う J A からつ、玄海町、唐津市、唐津農林事務所、東松浦農業改良普及センター、北部家畜保健衛生所、東松浦農業共済組合（家畜診療所）、からつ和牛改良組合、J A からつ肥育牛部会が支援組織として位置付けられている。

J A からつでは、平成 23 年度の C S 整備を皮切りに、平成 28・29 年度の中心的な経営体等の各施設・機械装置を整備してきたが、これらの施設整備等にあたっては、農家と関係支援組織（J A、市・町等）が一体となって構築してきたものである。

現在、J A からつ畜産課指導員 8 名が中心となって、関係支援組織の強力なバックアップを得ながら、繁殖農家の飼養環境改善、経営管理、飼養管理技術の指導・支援を実施している。

4 農家支援体制

(1) 飼養規模の拡大、労働負担の軽減のための支援

- ア 担当者会において施設整備、子牛育成及び C S 利用の課題・計画等検討、各支援機関の活動状況の提供【唐津市、玄海町、農林事務所、普及センター、家畜保健衛生所、共済組合、J A】
- イ 施設整備のための事業活用推進、機械施設の補助事業や制度資金等の情報提供、行政面からの指導等及び C S の利用促進等【唐津市、玄海町、農林事務所、普及センター】

ウ 和牛改良組合青年部、新規規模拡大農家を対象に飼養管理の技術指導などの支援を実施【普及センター、J A】

(2) 飼養管理の改善のための支援

ア 衛生管理指導（飼養衛生管理基準）のための定期巡回、繁殖牛部会等の研修会での情報提供【家畜保健衛生所、共済組合（家畜診療所）】

イ ワクチン接種、疾病等の診療・予防指導及び巡回データの提供【共済組合（家畜診療所）・J Aからつ家畜診療所】

ウ 繁殖・良質子牛生産のための技術指導、繁殖・出荷情報の収集・分析、指導内容の協議会等への報告及び地域内の普及【普及センター】

エ 連携して定期的な担い手の育成指導の実施【家畜保健衛生所、普及センター、共済組合、J A】

5 まとめ

唐津・玄海地区は佐賀県における肉用牛の主産地であり、以前からJ Aからつが中心となって、補助事業等の活用による牛舎整備を支援し、平成23年には肉用牛繁殖基盤強化のための中核施設となるJ Aからつキャトルステーションを整備してきた。

しかしながら、農家の高齢化や後継者不足によって、担い手が減少し、繁殖雌牛は平成21年をピークに減少、全国ブランド「佐賀牛」にとっても、一大産地である同地域における肥育素牛の確保は急務の課題となっていた。

このような中、畜産クラスター事業の実施を契機として、平成28年4月「唐津・玄海肉用牛振興協議会」を設立、このことで地域内の関係機関の連携が強化され、生産者とも一体となった活動を支援する組織体制が構築された。

以降、畜産クラスター事業を活用しながら、CSの機能強化、中心的な経営体への繁殖牛舎整備による肉用牛一貫経営の育成及び育成子牛ワクチンプログラムの実証試験等が行われてきた。

この間、J Aからつが中心となって対策に取り組んできたが、協議会の関係組織が役割分担を明確にしながら、CSの利用を基本とした活動方針の下に、それぞれの得意分野を生かした支援活動が着実に実行されてきた。

繁殖農家の子牛、育成牛の管理労働の軽減や空いた牛舎内スペースを活用し繁殖牛の増頭を図り、当初、5年後の目標に掲げた繁殖雌牛頭数4,500頭を3年で達成できたことは、協議会の関係機関が常に農家と向き合いながら、地域が一体となって地道な活動に積極的に取り組んできた成果である。

現在では、規模拡大を行う農家はCSに預託することを基本としており、今後もCSを中心とした生産基盤の強化に資する継続的な取り組みが実施されることが期待される。

(水元 健二、横溝 功、菊川 洋一)